

＜書 評＞

訳

坂本 龍生（神戸大学）

竹田 契一（大阪教育大学）

障害児の食事・言語援助の技法

才藤 栄一（慶大月が瀬リハビリテーションセンター）

原題は Eating Handicaps であり、中枢神経系に障害を持つ小児における“食べる”という行為での問題点とその訓練テクニックについて書かれた本である。訳の題名は、食事訓練→言語訓練という段階を意識して付けられたものであろうが、本の中で言語訓練については触れられていない。

中枢神経系に障害を持つ人、特に重篤な人では小児に限らず、食事の問題となる事がしばしばである。このような人々にとって食事は大きな欲求が苦痛に変わったというだけでなく、摂取量低下による栄養不良、誤嚥による肺炎といった危険を伴

う。しかしながら、リハビリ医学の中でその対策が十分に確立され、普及しているとは言い難い現状である。例えば、有名な Krusen's Handbook of P.M.R. の第三版でも Eating disorder については触れられていない。このような状況において具体的にそのアプローチについて書かれているこの本は、価値ある一冊と思われる。

内容は二部から成っていて、第一部では食事に関係する筋、神経などの解剖、生理が詳しくかつ容易に述べられている。第二部では、まず発達論に従った反射について書かれており、それに続いて食事の際の問題

点とその解決の為に訓練テクニックを解説している。要点は 口唇の閉鎖、下顎の咀嚼筋による安定、舌の適切な移動、軀幹と頸部の姿勢、などであり伸張反射、固有知覚フィードバックといった手段を用いた具体的なアプローチが述べられている。写真が豊富に使われており、各テクニックの重複はあるが、一読すれば、それらを応用できる様になっている。従って大変実用的な本と言って良いだろう。

訳は丁寧であるが、医学用語については一部不適切な部分がある様である。

ともあれ、小児関係のみでなく広くリハビリ関係者特に医師、OT、ST、看護婦の人々の一読が望まれる本には違いない。

(24×21cm, 208頁, 1984, ㊦4,800
パシフィックサプライ社刊)